

聖書:テサロニケ人への手紙4章13～18節

説教:主と会うのです

はじめに

9月4日に天に召された故川村美郁姉の前夜式と葬儀式は、それぞれ先週の9日と10日に無事に執り行うことができました。

普段自分が健康でいるときは、死ということを考えることはほとんどありません。きょう何を食べよう、来年はどこへ旅行に行こうか、そのようにしてまるでこのいのちがいつまでも続くかのように考えています。しかしあるとき、家族や親しい方が亡くなる時、いやおうなしに人は死ぬものであるという厳しい現実に向き合わざるを得なくなります。私は立場上、いろいろな方々の葬儀に参列することがあるのですが、中には葬儀の最後になり、いよいよ棺のふたが閉められるというとき、棺にすがりつく方もいました。それを拝見しながら、人のいのちは絶対に取り戻すことができない。これこそが私たちを絶望させているものであることを何度も思わされてきました。

今朝は主の再臨のことを取り扱うわけですが、このことが私たちが抱えている根本的な問題である死とどう関係するのか、共に考えていきます。

1 神による救い

1) 十字架における罪のさばきと死

聖書はまさにこの人の死の問題に真正面から向き合います。そもそも神が人を造られた最初のとき、この造られ世界はすばらしく、すべて完全であって死というものはありませんでした。ところが皆さんもご存じのように、私たちの先祖であるアダムとエバが神に逆らい、食べてはならないと言われていた木の実を食べて神に逆らって罪を犯した日から人は死ぬようになり、「罪から来る報酬は死です」と言われる世界になってしまった。神はこのような私たちをご覧になり、なんとか助けなければならぬと考えます。ではどのようにして助けるのか。大きく分けると三つのステップがあります。

最初のステップ。人を死から救うためには、根本の原因である罪の問題をまず解決しなければなりません。神の原則によれば、罪を犯した者はその罪の大きさによってさばかれなければなりません。神に逆らった罪は人のいのちをもってしか贖うことはできない。つまりだれひとり例外なく、

さばかれて滅ぼされる。これでは人を救うことはできない。そこでどうしたか。神のひとり子であるイエス・キリストと呼ばれる方が、私たちとおなじ肉をまとい、人の姿となられ、私たちの罪を背負い、十字架で私たちの身代わりとなってさばきを受けられ、死んでくださった。これが最初のステップです。

2) 主のよみがえり

私はまだ救われて間もない頃、ここで満足していたことを思い出します。私の罪は神が背負ってくださった。私の罪は赦された。しかしよく考えると、ここで終わっていたなら本当の救いにはならないのです。結局、人は死んで終わりという現実は何も変わりません。本当に人の罪が赦されたというのなら、私たちの死という問題はどのように解決されるのか、そこまではっきり示してもらわなければならない。

そこで第二のステップに進むことになる。イエスは十字架で死なれて墓に葬られました。しかし、三日目の朝、この方は墓からよみがえられます。このことを最初に目撃したのは、マグダラのマリアと呼ばれる女性でした。イエスの弟子たちは最初、主がよみがえられたことを全く信じなかったのですが、よみがえられたイエスに出会ったとき、いのちをかえりみず主の復活を宣べ伝えていく者として百八十度変えられていきました。

今朝開いていますテサロニケ人への手紙を書いたパウロもよみがえられたイエスで出会った人です。14節で「イエスが死んで復活された、と私たちが信じているなら」とありますが、パウロにとって「信じる」というようりも、まさに自分が体験した現実であったのです。イエスがよみがえられたこと。これが第二のステップになります。

3) 主の来臨の時

続いて第三のステップ。これまで第一と第二のステップは、イエスの死と復活でしたから、人が死からどのように救われるのかはまだ語っていない。第三のステップで初めてこれが実現します。そのことがまさに14節に集約されています。「イエスが死んで復活された、と私たちが信じているなら、神はまた同じように、イエスにあって眠った人たちを、イエスとともに連れて来られるはずです。」

二千年前、イエス・キリストはマリアを通して私たちのところに来られましたが、この方は再び私たちのところに来られます。そのときの様子については16節にあります。「すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。」

これを見ると主が再臨される時、この方は一人ではなく、眠った人たちを連れて来られるとあります。眠った人たちとはすなわち、キリストにある死者のことで、「先に天に召された人たち」と私たちが呼んでいる人たちのことを指す。主は、私たちに永遠のいのちを与えて、この肉体が滅びたとしても必ずよみがえらせてくださる。ここに私たちの本当の希望があるわけです。これがはっきりと示されているからこそ、私たちは死を恐れません。

そればかりではない。17節に「それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです」とあります。たとえ今、いつときは、愛する者と地上の別れを悲しむことにはなるけれど、必ず再会できる。その約束がここに書かれている。私たちは先に召された人たちとともに、死というものがない世界、天の御国に入れられていく。パウロも言うように、これこそが私たちの励ましであるわけです。

2 テサロニケ教会の問題

1) 眠った人たちが先か後か

ではテサロニケ教会の人たちはどうだったのか。彼らもこのことを心から信じて熱心に主の再臨を待ち望んだ。そこまではよかった。しかし彼らは主の再臨のときに何が起きるのかについて、誤解をしてしまう。そこに大きな問題が生じていました。15節がそれです。「私たちは主のことばによって、あなたがたに伝えます。生きている私たちは、主の来臨まで残っているなら、眠った人たちより先になることは決してありません。」

パウロのこの文面から、テサロニケの人たちの問題が浮き上がってきます。それは何であったか。主の来臨の時、眠った人たちが先に主にお会いするのか、それとも生き残っている者たち先に主にお会いするのか。どちらが先なのか。テサロニケの人たちは、生き残っている者たちがまず先に主にお会いできると信じた。パウロはそのところに大きな問題があると考えて、この手紙をわざわざ書くことになりました。

でも、皆さんはいまこの話を聞いてどう思いましたか。別にどちらが先でも後でも、主にお会いできることには変わりがないのではないかと。いつ

たいどこが問題なのか。そう感じた方が多いのではないかと。私も最初そう思っていました。

2) 再臨運動

そのことを考えるためには、テサロニケ教会が置かれていた現実について触れておく必要があります。パウロがギリシャのなかにある港町テサロニケを訪れ、そこで福音を語ったことで信じる人たちが起こされ、教会が建てられました。ところが、これ見てねたみを起こした町の人たちはパウロを迫害し、町から追い出してしまふ。その後、パウロはなんどもテサロニケに戻ろうと試みるのですが戻ることができなかった。でも教会のことが心配です。というのは、パウロをこれだけ激しく迫害した人たちは、やがて教会を迫害するだろう。それがわかっていたからです。

そこで自分の代わりにテモテを派遣して、教会の様子を見てもらうことにした。戻って来たテモテはパウロに、教会で大きな問題が起きていると報告する。どんな問題か。クリスチャンとしての迫害が厳しくなるにつれて、教会の中に主の再臨を待ち望む機運がふくらんできて、今すぐにでも主が再臨されるかのように言う兄弟たちが出てきた。それだけならまだ問題ないのだが、主の再臨を強く待ち望み過ぎるあまり、今日明日をどのように歩むのか、そんなことはどうでもよい、働くことをやめて主の再臨だけをひたすら待つ極端な人が出てきた。テモテはそう報告しました。

これはテサロニケ教会ばかりではなく、歴史を振り返ると、この二千年間、世界中で極端な「再臨待望」を唱えるグループがなんども表れていますから、別に特殊なことではありません。

3) 根本にある問題

この再臨運動は別の問題を引き起こしていきまふ。再臨運動に熱心な人たちと、そうは考えない人たちの間で摩擦が生じてくる。この人たちは、働こうともしないでただ毎日「主の再臨」と叫んでいるわけです。それだけでも不信の種になります。不信はやがて対立に発展し、やがて教会から平和がなくなっていく。主は私たちに救いと平安を与えてくださったはずですから、明らかにこれは何かが間違っています。

いったい何が問題であったのか。再臨運動家たちが主張していることばの中に象徴的に表れている事柄にパウロは注目しました。

再臨運動家たちの主張はこうでした。生き残っている人たちがまず先に主にお会いし、先に眠っ

た人たちは後になる。と言うのは、自分たちはこんなにも苦しんでいるではないか。主は真っ先に苦しむ者を救ってくださるに違いない。だから生き残っている自分たちが真っ先に主にお会いするはずである。そういう論理です。

3 神のみこころ

1) 窮極の苦しみを通った人たち

しかし、パウロははっきりと否定します。「生きている私たちは、主の来臨まで残っているなら、眠った人たちより先になることは決してありません。」

パウロは何を言いたいのでしょう。再臨運動家たちは、自分たちは苦しんでいるのだと主張しました。もちろんそこには嘘ではなかった。そう言わなければならないほどの痛みはあったでしょう。でも、本当に苦しんでいたのは誰だったのか。

それは私たちが判断するのではなく、公平な神の目でご覧になって判断することです。神は生きている者たちだけをご覧になっているのではありません。当然のことですが、眠った人たちのことをご覧になっている。そして、眠った者たちこそ、誰よりも本当の痛みをやってきた人たちであると見ておられる。なぜなら、人間としてもっとも苦しい死というものを経験しているからです。だから、眠っていた人たちこそが先にならなければならない。これがパウロの言おうとしていることです。

2) 苦しむ者に寄りそう

生き残っている者が先なのか、眠っている人たちが先なのか。どちらでもあまり変わらないのではないか。最初はそう思いました。でもよく考えるとここにも主のみこころが示されている大切な箇所だったので。

人が死ななければならない、その現実に対して主がどれほどに心を痛め、なんとかしなければならぬと思われていたのか。主は十字架においていのちをお捨てになることで、眠った者たちと同じ姿になりました。そのようにして、眠った者たちを黄泉の国から取り戻そうとされました。だから眠った人たちが先なのです。生き残っている者たちがいるなら、その人たちは後になる。それは決して差別ではない。主は、このようにしてまで苦しむ者に心を寄せてくださるのです。だからパウロははっきりと否定する。「生きている私たちは、主

の来臨まで残っているなら、眠っている人たちよりも先になることは決してありません。」

このことばは、神がどれほどに愛にあふれている方であるかを表しています。

神はここまで眠っている人たちのことを心に留めていてくださっている。そのことを知るとき、御名をあげめるばかりです。